



TITLE:

京大広報 号外

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

---

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 号外. 京大広報 2005, 0504s: 1873-1882

ISSUE DATE:

2005-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196498>

RIGHT:



# 京大広報

号外

2005. 4

## 目次

### 〈卒業式・学位授与式〉

卒業式における総長のことば……………1874

修士学位・修士（専門職）学位授与式における  
総長のことば……………1876

博士学位授与式における総長のことば……………1878

### 〈大学の動き〉

平成16年度卒業式……………1881

平成16年度修士学位・修士（専門職）学位

授与式……………1881

博士学位授与式……………1881

### 〈医療技術短期大学部の動き〉

平成16年度医療技術短期大学部

卒業式・修了式……………1882



平成16年度 卒業式



京都大学広報委員会

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

## 卒業式・学位授与式

### 卒業式における総長のことば

平成17年 3 月24日

総長 尾 池 和 夫

本日、卒業される、2,775名の皆さん、ご卒業おめでとうございます。ご来賓の長尾 真前総長、名誉教授、ご列席の副学長、研究科長、各学部長、教職員とともに、またご家族とともに、皆さんのご卒業を、心からお祝い申し上げます。京都大学を卒業した方たちは世界で活躍してきましたが、皆さんで卒業生の累計は、京都大学の108年の歴史の中で、17万1,185名となりました。皆さんには、16万8,410名の先輩がいるのであります。

社会人として活躍する場所を得た方、進学して学問の道を深めようとする方たち、さまざまな方向へ一歩を踏み出そうとしている皆さんは、今、さまざまな思いを抱き、それぞれの感激にひたっていることと思います。京都大学が国立大学法人によって設置される新しい制度のもとで、初めての卒業生ではありますが、京都大学は変わることなく、皆さんの母校として教育と研究を続けていきます。

卒業した後、皆さんにはあるときにはきびしい試験が待っているでしょうし、あるときには学問をしてきた大きな幸せを感じる場面も待っていることと思います。そのときどきに大学で学習したことを活かしていただきたいと思います。また、卒業したあとも皆さんの後輩たちのために、同窓会に参加し、母校のことを思い出して、後進を見守ってあげてほしいと思います。

祝辞を述べるにあたって、この1年のことを思い起こしてみました。国立大学の法人化という大きな出来事が皆さんの学問にマイナスの影響を与えなかったかと、私はそれを心配しておりました。とくに皆さんの後を進む方たちに、授業料の値上げという、あってはならないことが発生したのが、痛恨の極みであります。

また、昨年1年を通じて、あるいはこの日曜日にも起こりましたが、日本列島を、あるいは世界の諸国を、自然災害がつぎつぎと襲うという経験しました。私たちの暮らす固体地球の表面から上の大気圏や、地表から下の岩石圏にさまざまな現象が発生します。大学の教育と研究の役割には、このような大気圏の現象を知り、足元の大地を作る岩石圏のこと知って、地球という星を位置づける太陽惑星圏を知り、そして宇宙を知って、ものごとを考える



という分野があります。

兵庫県南部地震とその地震によって起こった阪神・淡路大震災から10年が経過しましたが、その10年の間にも京都大学の知の蓄積が確実に積み重ねられました。堀 高峯さんという先輩が博士学位論文として発表した研究は、西日本が現在、地震の活動期であることを裏付けるものでした。

今年1月に実施された入試センター試験の地学の問題には、地球に関する基本的な知識が網羅されていました。地球と人間に関する問題、海底地形や岩石、鉱物の問題、天体の運行と人間生活に関する問題、資源と人間生活に関する問題、地球の活動と災害に関する問題、あるいは天体、大気と海洋、地球の形やプレート運動、地質図や地球を構成する物質など、いずれも私たちが、京都大学の基本理念にもある地球社会の調和ある共存の課題について考えるときに必要な基礎知識に関する問題であったと思います。

21世紀に入る前から、市民の科学技術への期待は変化し、地球と人の共生、心の豊かな社会、安心な生活が重要とされてきました。そして、心の豊かさに科学技術は貢献すると人びとは思っています。科学者は心そのものに近づきたいと考えています。一方では、日本でも、市民の科学技術への関心が薄れています。科学技術が便利な暮らしを支えているのに気が付かないからでしょうか。私は少年のころ、ラジオを作り、時計を直し、外国の短波放送のベリカードを集めて楽しみました。今では機械はほとんど壊れなくなって、皆さんは身の回りの機械を直すことをあまり経験しなくなりました。現在では、機械の代わりに壊れやすいパソコンのシステムを直し



て楽しむことが多くなっています。便利な道具と生活の背景にある科学や技術が見えにくくなってしまったのかもしれませんが。

市民の望む、人と地球の共生のためには、人は地球をよく知ることが重要でしょう。地図で見て、日本と同じような大きさの島ですが、イギリスの大地は日本列島とはまったく異なっていて、気候もちがうし、安定大地には地震が起こることもありません。イングランドには活断層運動がないので、地形には起伏が少ないのです。同じ地球の上においても自然はさまざまな姿を見せます。

一方、京都には、変動帯の活動で山と盆地と扇状地ができました。プレート運動で北半球に陸が集まり、気候が変化し、京都盆地には豊かな地下水を含む厚い堆積層ができました。そこに生まれ育った京都の文化は、いわば変動帯の文化であります。京都の文化はもともとローカルなものですが、世界の人々が多様な価値観を容認することによって、多様な文化の相互理解を通じて、最もグローバルなものになる可能性を持っていると私は思っています。最もローカルな文化こそ、最もグローバルなものと言えると思います。それはまた、どの地域の文化についても言えることでありましょう。

1995年1月17日の兵庫県南部地震のあと、私は地震の研究者として、さまざまなことを考え、そしてすでに10年がすぎましたが、あの大震災のあと、自分の持っている専門家としての知識と市民の持っている地震の知識に、たいへん大きな違いがあるということ、あらためて確認しました。研究者は学生に教えるだけでなく、社会に知識を広める努力をしなければならないという思いを強く持ちました。知識を伝える仕組みを大学が組織的に備えていかなければならないと思います。

昨年も、インドネシアのバンドン工科大学で、21世紀COEプログラムの1つである「活地球圏の変動解明」のグループの主催による夏の学校に私も出席しましたが、そのバンドン工科大学のクスマヤント学長と自然災害の軽減のための研究と教育を進めなければならないと話しましたが、それが進む前に、インド洋に起こった大津波のニュースを見ながら、また専門家の知識と世界の市民の知識との差を思い知らされる出来事を経験する思いでした。

京都大学の基本理念には、地球社会の調和ある共存に貢献するということがありますが。地球科学の研究者にとっては、地球に大きな現象が起こるたび

に「なるほど」と教えられることばかりで、思いもよらないというような現象はあまり起こることはありませんが、世界の市民にとっては思いもよらないという現象がたびたび起こるのです。市民の知識と専門家の知識の差が大きいということを、自然災害が起こるたびに、くり返し教えられるのです。

地震や噴火のような突発現象でなくても、地球にはさまざまな自然があります。例えば、どこの陸にも河川がありますが、この河川についても単に自然の河川としての性質だけでなく、国際社会の中での多くの課題を私たちは考えていかなければなりません。

日本は全体が島で構成されているから陸上に国境がないのですが、したがって、いわゆる国際河川がありません。大陸には普通に国際河川があって、国際河川の流域は地球上の陸地の45パーセントにもなるといわれます。例えば、スーダンから流れ出るナイル川の水は、下流のエジプトの総水利用量の97パーセントを占めているそうです。

ナイル川の他にも、北米のコロラド川、南米のラプラタ川、ヨーロッパのライン川やドナウ川、中東のヨルダン川やチグリス・ユーフラテス川、アジアのインダス川、ガンジス川、ブラマプトラ川、メグナ川、メコン川とよく名の知られている大河は、大きな流域面積と川をめぐる紛争をかかえる国際河川です。そのような河川の問題をさまざまな側面から考えていくことも、今日卒業する皆さんに与えられた重要な課題の一つと言えます。

地球に住む霊長類のことも少し考えてみましょう。昨日、アフリカのギニア共和国から私の部屋に來客がありました。ギニア高等教育省科学技術研究局副局長のタンバ・タビノ（Tamba Tagbino）さんです。私たちは学術交流をさらに進めることを話しました。

京都大学霊長類研究所では、ギニアのボッソウ村にいる野生チンパンジーの生態や行動の研究を行っています。杉山幸丸さんが1976年に調査を開始し、今、松沢哲郎さんたちが研究を続け、来年で30年になります。ボッソウのチンパンジーは1群だけで、その数は、ほぼ20人前後です。松沢さんはチンパンジーも20人と数えます。ボッソウのチンパンジーが生き残るために、松沢さんたちは、ボッソウとニンバ山のあいだにある長さ4 kmのサバンナに「緑の回廊」を作ることを思い付き、1997年1月から仕事を始めました。松沢さんたちは、ボッソウ村で人と

共存する珍しいチンパンジーの群れを守るために寄付を募っています。皆さんも松沢さんのサイトを読んで、今日の卒業の記念として、その運動に寄付をしてみたいでしょうか。そして、いつかギニアをぜひ訪れてみてほしいと思います。京都大学は、そのような遠い場所にも、研究の拠点をさらに大切に育てていきたいと思っています。

地球のことを、あるいはそこに住む人の社会のことを知るのは研究であり、市民にその知識を伝えるのは教育です。研究は進んでいても、その成果が市民に伝わらなければ役に立ちません。大学で仕事する研究者自身の著作活動、講演会やテレビ番組企画への協力なども重要なことですが、市民にわかりやすく話をするということは、かなり訓練をしないと、たやすくできることではないのも確かです。大学が行う広報活動、ホームページなどでの情報の発信、講演会や展示会、博物館など、市民に開放された場

を通じて行う活動もあります。京都大学を卒業する皆さんも、大学で得た知識を市民に伝える役割を、ぜひはたしていただきたいと思います。

京都大学の卒業生となる皆さんは、平和を大切にする人であってほしいと願っています。広島原爆ドームの周りがある大きな楠は、広島市の木に指定されていますが、同時に京都大学のロゴマークにもなっています。日本の都市で、京都に次いで世界の人々が知っている都市は広島です。社会に出る皆さんは、世界の平和を大切にし、地球を大事にする人であってほしいと思うのです。そして人類の福祉に貢献する仕事をしてほしいと思っています。また、何よりも大切なことですが、健康に気をつけて心身ともに元気に仕事をしてほしいと願っています。

これからの人生を大切に生きてほしいと願って、私のお祝いの言葉といたします。ご卒業、おめでとうございます。

## 修士学位・修士（専門職）学位 授与式における総長のことば

平成17年3月23日

総長 尾 池 和 夫

今日、京都大学修士の学位を得られた2,068名、社会健康医学修士（専門職）の学位を得られた20名の方々、まことにありがとうございます。ご来賓の沢田敏男元総長、ご列席の副学長、各研究科長、教職員とともに、心からおよこび申し上げます。また、ご家族の皆様にも心からお慶び申し上げます。皆さんを入れて、京都大学修士は累計50,489名になりました。また、社会健康医学修士（専門職）は初めての修士生20名を送り出すことになりました。

今、日本の第3期科学技術基本政策に関する議論が行われています。そのような時期に向けて、いくつかの報告がありますが、今年に入って出された報告書などの中で、いくつかのものに私は注目しています。その中の1つは、1月28日に記者発表された三菱総合研究所による「有識者オピニオン調査（科学技術分野）」の『社会の発展に貢献するための科学技術のあり方』に関する9つの提言であります。

それによると、まず、これからの科学技術のあり

方、および科学技術政策の進め方では、環境との共生や心の豊かさの実現などへの貢献が期待され、それを目指す将来の姿について広く社会から理解を得るようにするということがあります。同時に政策立案側の伝える努力だけではなく、市民の側も関心を高めて、政策決定にも多様な形で市民が参画する必要がありますとしています。

科学技術の発展を支える人材の育成においては、広範な見識から科学技術と社会との関係を捉える人材を育成することが必要と述べており、また、子どもたちの科学技術に対する理解を促すこと、研究者や技術者が、科学技術を伝える技術の向上にも取り組もうと提言しています。

これらの結果は、学界や産業界、行政などの分野の有識者にアンケートして得られたものであり、それらの人々が現在どのような考え方を持っているか知る手がかりとなるものであり、これからの大学の教育と研究を考える上に、参考にすることのできる資料の一つとしてとらえることができます。

20世紀は資源やエネルギーを利用して開発を進め、急速な発展を目標としてきた社会でしたが、京都大学の基本理念にもあるように、21世紀は地球社会の調和ある共存を課題としていくことを、私たちは望



んでいます。人々が豊かな暮らしを求めるのは、調和ある共存を前提とした希望なのであります。また、人々がさまざまな情報を正しく共有して、そのような暮らしを実現していくことが大切であり、そのためには知の創造と蓄積を役目とする大学が、その持っている知識を広く伝える役割を果たさなければなりません。

次に注目したのは、1月18日に社団法人日本経済団体連合会が出した「これからの教育の方向性に関する提言」であります。この報告では、教育への期待として、社会で必要とされる知識や判断能力を身につけること、自国の伝統・文化・歴史に関する教育を充実させること、リーダーの養成、家庭や地域での基本的道德教育の徹底というような、4つの項目が挙げられています。

そのための教育の今後の方向性としては、高等教育での予算配分のあり方について、GDPに占める高等教育予算の割合を、今の0.5%から欧米並に1%まで上げるとする趣旨の提言が行われています。

科学技術の基盤においては、アメリカの大学が今は圧倒的に強い力を持っています。いろいろな議論はありますが、やはり大学の研究のために使う資金が圧倒的にちがっていることが、何と言ってもその原動力です。学問においては、国は資金を出すのが口は出さないという仕組みが基本ですが、その基本を守り通すためには、国に資金は出させるが口は出させないようにするだけの技量を、大学が持つという努力をすべきなのであります。

日本経済団体連合会の考えにある、高等教育予算を欧米並みに1%まで上げるという方針には私も賛同します。そして、その資金を国公立大学を通して、日本の大学が連帯して国際競争力を持つために使えるようにしたいと思います。国の将来のために、また地球社会の調和ある共存に向かって、日本が優れた人材を確保していくためには、今、何よりも教育費の個人負担を軽減することが必要であると思っています。今日修了する皆さんも、高等教育の将来のために、大学を支援する世論として大いに声をあげて、そして京都大学修士として、今後とも、出身のこの大学を支援してほしいと思います。

本日学位を得られた方々の論文の課題を見渡していて、21世紀の地球社会のために設定された研究課題が、京都大学の修士論文の課題の中に、たいへん多くなってきたと感ずることができました。私は今回そのことをうれしく思いました。それらの題目を



少し列挙してみたいと思います。さまざまな形で多様な社会の中での共存が考察されているということを感じ取ることができます。

経済学研究科の徐春燕（ジョ シュウエン）さんの論文題目は「異文化環境における日本企業の経営理念－京セラフィロソフィの事例を中心に－」です。日本の企業の、人の心を大切にしている理念が思い浮かびます。

理学研究科のMANAHAN JANETTE JOSON（マナハン ジャネット ホーソン）さんの論文題目は「1994年11月15日フィリピン・ミンドロ地震（Mw7.1）の震源過程」で、日本と同じプレート収束帯の自然災害の多い変動帯における自然現象の理解を深めるものであります。

同じく、理学研究科のLUIZA MAJUAKIM（ルイザ マジュアキム）さんの論文題目は「キナバル山山地熱帯降雨林における樹木葉ポリフェノール物質が土壌水の溶存有機態窒素に与える影響」です。京都大学が得意とするフィールドワークによる地道な基礎研究が、地球の将来を支えることにつながっていきます。

医学研究科の多田理恵さんの論文題目は「持続的植物状態にある寝たきり高齢者」の延命治療について－事前指示書「命の遺言書」作成の意義」です。豊かな暮らしを大切にする、これからの医療の課題は、さまざまな観点から進めていかなければなりません。

工学研究科の韓勝旭（ハン スンウク）さんの論文題目は「在日コリアン集住地区の形成過程と居住空間の変容に関する研究－京都市東九条地区を中心として」で、日本と隣国の歴史に深く関わる重要な課題を研究テーマとしています。

工学研究科の松本真俊さんの論文題目は「宇宙太陽発電所のための自動校正機能を有する到来方向推

定法に関する研究」です。21世紀のエネルギー資源を求めて、将来の技術につながっていく研究であります。

農学研究科の菅野美緒さんの論文題目は「都市近郊における持続可能な農地保全活動の要件に関する研究」です。昨年、国立シンガポール大学を訪問して学長さんと話したとき気づいたことがあります。国立シンガポール大学は、たいへんな勢いで先端科学技術の研究を進めていますが、その大学には農学の分野がありません。このような傾向の中で、京都大学の農学分野の役割がますます重要になってくると思います。

アジア・アフリカ地域研究研究科の周密（シュウミキ）さんの論文題目は「1960年代におけるタンザニア：中国関係とタンザニアのウジャマー開発政策の成立」です。中国から京都大学に留学して、そこを足場にしてアフリカの国の研究をするという国際的な展開ができるのも、京都大学の重要な役割を示すもので、このような研究が大いに進んでほしいと思っています。

地球環境学舎の坪内久弥さんの論文題目は「より安全で持続的に利用可能な飲料水のあり方－水質の向上と水源保全－」です。水を確保するのは調和ある共存のための基本であります。例えば、水を日本は大量に輸入しています。間接水などの呼び方がありますが、食料や木材の形で輸入される水が多いの

です。中でもアメリカからは、427億立方メートルの水を毎年輸入していて、大変目立っています。その次がオーストラリアの、105億立方メートルで、今は少し減ってはいますが、いずれも牛肉を生産するための小麦の栽培に使う大量の水であります。他の国からの分も入れて、総計744億立方メートルの水を1年間に輸入していることになります。日本人は、生活用水の直接の給水量も多く、毎日1人あたり322リットルの水を使います。アメリカの425リットルに次いで多い国です。ちなみに、エチオピアでは、たった9リットルです。例えば、このような水の問題だけをとり上げてみても、考えることはいくらかでも出てくるのです。

本日、修士の学位を得られた皆さんは、これからさらに進学して学問の世界に深く入っていこうという方も、また明日から社会人として新たな場所で活躍を始めようという方も、いずれにしても、修士課程で得た知識と知の創造へのアプローチの能力と身につけた方法を生かして、それを広く京都大学から世界へ伝え、広めていく役割を果たしていただきたいと思います。

同時に、人類の福祉のために貢献するということの基本として、それぞれの道を進んでくださることを願って、私のお祝いの言葉といたします。

おめでとうございます。

## 博士学位授与式における 総長のことば

平成17年3月23日

総長 尾 池 和 夫

本日、京都大学博士の学位を得られました課程博士514名、論文博士97名の皆さん、おめでとうございます。ご列席の副学長、各研究科長、教職員、ご家族のみなさまとともに、今日この日まで研究を続けてこられた、そしてその成果をまとめて見事に京都大学博士になられた皆さんの努力を讃え、心からお祝い申し上げます。今日の学位授与で、京都大学の学位の数は、全部で、23,453名になりました。その内訳は、16分野で、課程博士累計11,763名、論文



博士累計11,690名であります。その中に、京都大学博士（地球環境学）の初めての5名が含まれていま



す。また、他にも京都帝国大学での旧制博士学位、9,651名があり、これらを総計すると京都大学の108年の歴史の中で生まれた博士は、33,104名となります。

今年2月、地球から約127億光年の距離にある、生まれて間もない銀河団が発見されたというニュースがありました。ハワイのすばる望遠鏡で観測されたものです。知られている銀河の集団として最も遠く、つまり最も古いという銀河です。宇宙の年齢は137億年と言われており、宇宙の誕生から約10億年後の姿をとらえたわけです。

基礎研究の分野はさまざまですが、ときどきこのようなニュースが伝わると、世界の人々が注目し、宇宙の時間の流れに思いを馳せています。

この宇宙の時間の流れの中で、今日博士学位を得られた皆さんの学位論文の中から、そのいくつかを紹介してみたいと思います。

理学研究科、物理学・宇宙物理学専攻の高橋芳太さんの論文題目は、「重力レンズで探るブラックホール時空とバリオンのダークマター」です。主査は嶺重 慎教授です。

高橋さんは、ブラックホールが光学的に薄い降着流中に存在する場合や、光学的に厚く幾何学的に薄い降着円盤中に存在する場合であっても、ブラックホールのスピンをブラックホールの影から決定することが可能であることを、世界で初めて見いだしました。次に、ブラックホールの影を使って、ブラックホールの電荷も測定できることを示しました。一連の仕事は、超強重力場における物理過程という、天文学の中心課題の一つに大きな指針を与えるものであり、高く評価されるものです。

同じ専攻の植野 優さんの論文題目は、「X線で選択した超新星残骸－銀河系宇宙線加速への寄与について」です。主査は小山勝二教授です。

超新星残骸は、銀河系内における宇宙線加速源の最有力候補であるにもかかわらず、知られている220天体のうち、加速の証拠が得られているのは10天体程度に限られています。この植野さんの研究で、新たに加速の証拠であるシンクロトンX線を示す超新星残骸の候補が10数個発見され、2天体で確実な成果が得られました。この結果は、シンクロトンX線が期待される超新星残骸は、どのような天体かを明確にしたものであり、今後の研究に道筋をつけたものとして重要であります。

理学研究科、地球惑星科学専攻の小出雅文さんの論文題目は、「暴浪イベント指標としての前浜堆積物中の生痕化石の重要性」です。主査は増田富士雄教授です。

過去の生物の生活の痕跡がよく地層に記録されています。生物の巣穴や食べ歩いた痕が残されるのです。これらを生痕化石といいます。生痕化石は環境の指標として重要視されます。小出さんの論文は、とりあげた、これまで甲殻類のヒメスナホリムシがつくったとされてきた生痕が、多毛類のオフエリアゴカイによって形成されたものであることを明らかにして、不規則に屈曲したものと直線的に平行に配列したものとがあることを見いだしました。現世のゴカイの観察から、屈曲したものは平常時の摂食痕で、直線状のものは暴浪時に陸側に避難したあと平常時の生活場所に戻るときにつくられた生痕であることを明らかにしました。遠い昔のそのような環境までがこの研究によってわかったことに私はあらためて感銘を受けました。

人類の歴史に入りますが、次は文学研究科で審査された論文博士のものです。丹下和彦さんの論文題目は、「悲劇の世紀－前5世紀アテナイ精神史としてのギリシア悲劇－」です。主査は中務哲郎教授です。

ギリシア悲劇は紀元前6世紀後半に興り、5世紀の間に千を数えるほどの作品が生み出されました。ギリシア悲劇は科白の他に歌と踊りが占める割合も大きく、何よりもまず劇場で見て楽しむものであったのですから、見る芸術から精神史を読みとることができるのかという疑念が湧くのですが、丹下さんはこの作業を支えるのにふさわしい指標を見つけました。法と自由と叡智が三大悲劇詩人の作品の中でどのように扱われているかを跡づけることにより、悲劇解釈に基づく精神史という構想を成功させたのであります。

次は今の瞬間を取り扱うもので、理学研究科、地球惑星科学専攻の佐藤和彦さんの論文です。題目は、「地震の初期過程と複雑さの地震規模依存性」です。主査は、MORI, James Jiro (モリ・ジェームズ・ジロウ) 教授です。

地震はある点から始まる破壊の成長で起こる現象ですが、佐藤さんの研究の重要な結果の一つは、どのような地震も、始まりの大きさはおよそ同じサイズだということです。M3.5からM7.9の地震



では、最終的な大きさにはそれぞれ数キロから数百キロという差があるのですが、始まりのサイズは12mから96mとあまり変わらないという結果が得られました。つまり、中規模から大規模地震は同じような破壊過程で始まり、最終的なサイズと始まりのサイズの間に相関関係はないということを、この結果は示しています。地震の始まりのサイズに加えて、申請者は地震の始まりにおける破壊の複雑さについても調べました。どの地震も始まりのサイズはほぼ同じであるという結果と、破壊の複雑さを結びつけて、大規模地震の震源過程を理解する上で重要な結果を得たものであります。

論文博士の山本敏哉さんの論文題目は、「琵琶湖の水位変動とコイ科魚類の初期生態」です。主査は遊磨正秀助教授です。

琵琶湖のヨシ群落におけるコイ科魚類の初期生態を、餌の現存量の変動、ヨシ群落内での底質の分布状況、水位の変動との関係で着目した研究です。水位調整の影響に関する研究成果が、直接に国土交通省の政策の論拠として採択された研究として特筆できるものです。最大水深が100mにもおよぶ琵琶湖での、わずか20ないし30センチの水位変動が、魚類の個体群維持に大きな影響を与えていることが明らかとなりました。水位の低下調整が強化された1992年以降、琵琶湖の多くの魚種で漁獲量の急な減少がみられており、本研究は、他の魚種への研究展開の基礎となる先駆性に富む成果といえるものです。

理学研究科、地球惑星科学専攻の名倉元樹さんの論文題目は、「インド洋における年々変動に伴う海面水温偏差の季節発展とエルニーニョ-南方振動との関係に関する研究」です。主査は淡路敏之教授です。

熱帯海洋に見られる顕著な年々変動現象は、全球規模の気候に影響を与えることから、その役割と変動メカニズムの解明が注目され、これまでに様々なアプローチにより調べられてきました。名倉さんの研究は、モンスーンの強い季節シグナルを背景場としたインド洋の年々変動の特殊な条件に着目して、インド洋の海上風偏差に影響を与える物理過程を研究したものであります。

海洋研究開発機構（JAMSTEC）は、世界で最も高速のスーパーコンピュータを持っています。それは「地球シミュレータ」と呼ばれ、1秒間に40

兆回という計算速度を持つスーパーコンピュータです。この地球シミュレータを使って大気循環のシミュレーションが行われ、現在の炭酸ガス排出量の増加がつづくと、ある程度まで増加したとき、不可逆過程に入って気温の上昇は止められなくなってしまうという結果が出ています。このシミュレータは私たちの社会の未来を設計し制御できる可能性を示しています。

また、JAMSTECは地球深部探査船「ちきゅう」をほぼ完成してテストを行っています。これによって私たちは初めて7,000メートルまで掘削できるようになり、例えば300万年の間の地球環境変動を分析し、さらにさかのぼって生命の起源を知る資料を得る期待もあります。このような分野にも、京都大学で学位を得た多くの研究者たちが参加して活躍しており、また皆さんの学位論文の成果が応用されています。

今日の焦点は、基礎研究の分野に当ててみましたが、基礎研究を元にして、科学技術は市民の夢を具体的な形で育ててきました。1901年の初頭に報知新聞に掲載された「二十世紀の豫言」の中には、技術の進歩に関して、未来をかなりうまく予想したものがたくさんあります。予想は電信電話に始まり、東京にいてロンドンやニューヨークの友人と自由に対話できると書いてあります。この夢は十分に実現しました。夢の中には7日間世界一周や鉄道の数分もあり、自動車の夢も100パーセント達成されたといえるでしょう。

今世紀、真の科学技術立国へ向かうためには、科学と技術を自分の関心で考える市民を育て、その参加のもとに次の世代を育てる必要があります。大学がその役割を果たすためには、大学の中身を市民によく理解してもらうことが重要です。大学で行っている研究とそれによる知の蓄積をもとにした教育は、どの分野をとっても実に面白いものです。この学問の面白さを多くの人々に伝えて、その中から学問に熱中する研究者を育てることが京都大学の重要な役割の一つでもあり、私は、それを、本日新しく京都大学博士となった皆さんにも期待するのであります。

今日までに身につけた知識と、研究を進める能力を発揮して、皆さんがさらなる活躍をされるよう願って、博士学位の祝辞といたします。

おめでとうございます。

## 大学の動き

### 平成16年度卒業式

3月24日（木）午前10時から、総合体育館において長尾 真前総長、名誉教授をはじめ各副学長、各部長等の出席のもと平成16年度卒業式が挙行された。式は京都大学交響楽団による式典曲「輝を垂れて千春を映さんとす」の奏楽で始まり、学歌斉唱の後、尾池和夫総長より各学部代表に学位記が授与された。

続いて総長の式辞があり、最後に全員で「蛍の光」を合唱して、午前10時50分に終了した。

新学士は、総合人間学部150人、文学部225人、教育学部76人、法学部393人、経済学部262人、理学部

267人、医学部103人、薬学部78人、工学部929人、農学部292人の計2,775人であった。



### 平成16年度修士学位・修士（専門職）学位授与式

3月23日（水）午前10時から、総合体育館において沢田敏男元総長をはじめ各副学長、各研究科長、



学舎長等の出席のもと平成16年度修士学位・修士（専門職）学位授与式が挙行された。尾池和夫総長より各研究科、学舎代表に学位記が授与された後、続いて総長の式辞があり、午前10時40分に終了した。

修士課程修了者は、文学98人、教育学48人、法学63人、経済学81人、理学246人、医科学12人、社会健康医学1人、薬学77人、工学605人、農学279人、人間・環境学145人、エネルギー科学124人、地域研究8人、情報学177人、生命科学75人、地球環境学29人の計2,068人で、専門職学位課程修了者は、社会健康医学20人であった。

### 博士学位授与式

3月23日（水）午後1時から、総合体育館において、尾池和夫総長、教学担当の理事をはじめ、各研究科長・学舎長出席のもと博士学位授与式が挙行された。

総長から、各授与者に対し学位記（平成17年3月23日付）が手渡された後、総長の式辞があり、午後2時30分に終了した。

各分野別内訳は次のとおりである。



平成17年 3月23日付 博士学位授与者数一覧

学 位 名	課程博士	論文博士	合 計
博士（文学）	20 人	13 人	33 人
博士（教育学）	5	6	11
博士（法学）	2	3	5
博士（経済学）	17	3	20
博士（理学）	86	5	91
博士（医学）	87	10	97
博士（社会健康医学）	4	－	4
博士（薬学）	30	－	30
博士（工学）	102	35	137
博士（農学）	56	17	73
博士（人間・環境学）	31	－	31
博士（エネルギー科学）	10	－	10
博士（地域研究）	9	－	9
博士（情報学）	29	5	34
博士（生命科学）	21	－	21
博士（地球環境学）	5	－	5
計	514	97	611

## 医療技術短期大学部の動き

### 平成16年度医療技術短期大学部卒業式・修了式

医療技術短期大学部では、3月17日（木）午前10時から、本短期大学部講堂において、来賓の出席のもとに卒業式・修了式が挙行された。

式は、卒業証書・修了証書授与に引き続き、学長式辞、来賓祝辞があり、午前10時50分に終了した。

卒業生は、看護学科82人、衛生技術学科42人、理学療法学科20人、作業療法学科14人で、修了生は、専攻科助産学特別専攻20人の計178人であった。

